

# 韓国の高等学校における探究学習の特性と意義

—活動領域に注目して—

\*松 本 麻 人

はじめに

1. 高校「教育課程」における探究学習
    - (1) 「教育課程」の概要
    - (2) 教育課程における探究学習
    - (3) 創意的体験活動と「2022年改訂教育課程」
  2. 「創意的体験活動」の変化
    - (1) 目標
      - ①2009年改訂教育課程
      - ②2015年改訂教育課程
      - ③2022年改訂教育課程
    - (2) 活動領域
  3. 考察
- おわりに

## はじめに

東アジアの学校教育において知識や技術の獲得に重点を置いてきた学校教育は、少なくとも理念上はすっかり過去のものとなり、現在では知識・技術の獲得のみならずその活用、また活用のあり方とに焦点が当てられるようになって久しい。近年でも日本では、上述のような方向性が学力の3要素という形で新たに明示されている。こうした潮流にあって注目される学習形態の1つとして、探究学習があげられる。例えば高校の場合、学習指導要領の改訂に伴い、「総合的な学習の時間」の名称が「総合的な探究の時間」に変更され、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力」（文部科学省2018:475）を育成することが目標として掲げられている。

韓国の場合、全国水準の教育課程の2009年の改訂で教科外活動として「創意的体験学習」が導入され、様々な体験活動を通じて主体性や協調性などの涵養が

目指されている。ボランティア活動やサークル活動もその内容とする創意的体験活動は、必ずしも課題解決学習中心の活動ばかりではないが、自ら課題を設定してその解決のために学習を進める活動を含む様々な活動の実施が想定されている。こうした韓国の創意的体験活動については、日本の先行研究によってもその概要や特徴が明らかにされている（田中2017、石川2018など）。

導入から約10年が経過し、学校現場での一定の定着をみせる創意的体験活動だが、新たな動きもみせている。韓国の教育課程は欧米諸国のナショナルカリキュラムと比べて教育内容等について細かく規定しており、創意的体験活動についても、その「内容決定においては各学校の裁量が大きい一方、従うべき指針も多い」（石川2018:35）と指摘されている。しかし、2022年12月に公示された「2022年改訂教育課程」においては、創意的体験活動の活動領域が4つから3つへ縮小したり、従前は示されていた共通指針や領域別指針が削除されたりするなど、変化も現れている。

こうした新たな動きは、韓国の高校の探究学習のあり方にどのような影響を及ぼし得るのか。本稿は、こ

\* 名古屋大学大学院教員

れまでの高校教育課程で定められてきた探究活動の目的や内容について、特に活動領域に注目しつつ整理し、その特性と意義を明らかにするとともに、教育課程の改訂に伴うその変化について考察することを目的とする。

## 1. 高校「教育課程」における探究学習

### (1) 「教育課程」の概要

韓国では、初等中等教育機関で実施される「教育課程」(교육과정)と呼ばれる全国水準の基準が定められている。私立学校も含め、すべての初等学校(日本の小学校に相当)や中学校、高等学校がそれぞれのカリキュラムを定める際に基準としなければならない(「初等中等教育法」第23条)。教育課程は、韓国内の学校教育の内容を法的な拘束力をもって強く規定するものとして位置づけられている。

最初の教育課程は1954年に公示され<sup>1</sup>、以来10回にわたって改訂されてきた。当初は改訂の回数にしたがって「第〇次教育課程」と称していたが、2007年の公示からは改訂された年を冠するようになった。2023年現在の教育課程は、「2015年改訂教育課程」と呼ばれている。2022年12月に新たな教育課程、すなわち「2022年改訂教育課程」が公示され、2024年度より順次各学年に適用されていく予定である。

教育課程は、「総論」のほか、各教科や教科外活動に関するものが定められる。高校の2022年改訂教育課程の場合、「初等中等教育課程総論」、「国語」科、「社会」科、「道徳」科、「数学」科、「科学」科、「技術・家庭」科、「情報」科、「体育」科、「音楽」科、「美術」科、「演劇」科、「英語」科、「第2外国語」科、「教養」科、「創意的体験活動」の教育課程がそれぞれ定められている。「総論」では、教育課程が育成を目指す人間像や核心理念(キー・コンピテンシー)、各段階の学校の教育目標、教授・学習や評価の原則、教育課程の編成や運営の基準などが示されている。各科目の教育課程では、総論で示された原則の下、「性格及び目標」、「内容体系及び達成基準」、「教授・学習及び評価」の各タイトルから構成され、より具体的な内容が規定されている。

教科の目標のほか、教授内容や評価基準、方法などを細かく規定するなど、ナショナル・スタンダードとしての韓国の教育課程は、最低基準を定めるというよりも、各教科活動に係る細目を定めているという点が特徴の1つである。その点では、欧米のナショナルカリキュラムよりも日本の学習指導要領に類似するといえるだろう。

### (2) 教育課程における探究学習

さて、韓国の近年のカリキュラム改革について、探究学習という観点からみていきたい。「2009年改訂教育課程」において、高校の教科は「基礎」、「探究」、「体育・芸術」、「生活・教養」の4つの領域に分類されることとなった。「基礎」領域の科目は国語科、数学科、英語科、「探究」は社会科、科学科、「体育・芸術」は体育科と芸術科、「生活・教養」は技術・家庭科、第2外国語科、漢文科、教養科、の各教科・科目から構成された。その狙いについて、教育科学技術部(現教育部。日本の文部科学省に相当)は、「基礎」領域科目をすべての生徒が必ず履修しなければならない基礎的な科目群として位置づける一方、「探究」領域科目は、生徒の興味・関心にしたがって選択し、学びを深めるものという見方を示した。教育部によると、「探究」領域の科目、すなわち社会科及び科学科の各教科については、従前の知識伝達中心の画一的な授業を見直し、多様な授業・学習方法を通して、学びの遂行能力に重点を置いたという(教育科学技術部 2009: 3)。

教育課程における児童生徒の自律性の向上や選択の幅の拡大は、民主化の流れが加速化する中でカリキュラム編成や運営に関する裁量が各地方や各学校に委譲されるようになった1990年代以降(石川 2018: 33)、カリキュラム改革の基本的な方向性といえる。こうした改革に対しては、たとえば探究科目の選択幅の拡大に関して生徒の知識不足を懸念するなど、批判的な見方もある(チョ 2013)。しかし、いわゆる「PISA 型学力」を念頭にコンピテンシーの育成に重点を置く教育の潮流を受け、探究学習や体験活動を重視する理念は一層強化されているといえよう。

2009年改訂で行われたカリキュラム領域の再編は、現行の「2015年改訂教育課程」にも引き継がれている。すべての教科(教科外活動である創意的体験活動を除く)が従前の4つの領域に分けられていることに変化はないが、必修科目が設定されたことに加え、教科にも再編がみられた。すなわち、「基礎」領域の教科に韓国史が追加され、同名の科目が必修科目となった。さらに「探究」領域の社会科と科学科には、統合社会と統合科学、科学探究実験が必修科目として設置された(表1)。なお、表1に含まれていない科目は、選択科目として別途まとめられている。

「探究」領域に新たに開設された科目には、確かに探究活動を意識した学習内容が盛り込まれている。例えば、「統合社会」はその目標として、「人と自身の人生、これをめぐる多様な空間、そして複合的な社会現象を、過去の経験や事実資料、多様な価値を考慮しな

表1：「2015年改訂教育課程」の高校教科編成及び単位数

	教科領域	教科（群）	必修科目（単位）	必修履修単位	自律編成単位
教科（群）	基礎	韓国語	韓国語（8）	10	生徒の適性・進路 を考慮して編成
		数学	数学（8）	10	
		英語	英語（8）	10	
		韓国史	韓国史（6）	6	
	探究	社会 （歴史／道徳を含む）	統合社会（8）	10	
		科学	統合科学（8） 「科学探究実験」（2）	12	
	体育・芸術	体育	—	10	
		芸術	—	10	
	生活・教養	技術・家庭／第2外国語 ／漢文／教養	—	16	
	小計				
創意的体験活動					24
総履修単位					204

（出典）教育部「2015年改訂教育課程 総論」2015年より筆者作成。

がら、探究して省察する能力を育む」ことを掲げている。学習過程においては調査や説明、分析、提案といった活動に重点が置かれており、各出版社が作成する教科書でも関連する内容が多数散見される。たとえば、知学社（지학사）が発行する教科書『統合社会』は、単元ごとに「統合主題探究」という活動を設けている。単元「人間、社会、環境と幸福」では、「青少年が幸福となる政策を提案する」というテーマで、「自身が幸福だと感じる瞬間と、不幸だと感じる瞬間に関する目録を作成してみよう」、「私の幸福な人生のためにどのような実践をしなければならないか、書いてみよう」、「韓国の青少年の幸福な人生のために、社会が備えなければならない条件とは何だろうか？」、「これまでの活動をふまえて、青少年の幸福指数を高めるための政策を提案してみよう」などの一連の活動が提示されている。

なお、この「統合社会」は、「人間、社会、国家、地球共同体及び環境について、個別学問の境界を越えて統合的な観点から理解し、それを基盤として基礎素養と未来社会に必要な力量を涵養する科目」として、その目標は①「時間的、空間的、社会的、倫理的観点を通して人間の生と社会現象を統合的に見渡す能力を育む」、②「人間と自身の生、これを取り巻く多様な空間、そして複雑な社会現象を過去の経験や事実資料と多様な価値を考慮しながら省察する能力を育む」、③「日常生活と社会で生じる多様な問題に対する合理的な解決方を模索し、これを通して共同体の構成員としての自身の生を統合的な観点から省察し、設計する能力を

育む」と定められている（教育部 2018）。特に注目すべきは、「共同体の構成員」として人類社会へ積極的に関わる姿勢と能力の涵養に言及している点である。国家的な偏狭な視野に立ったものではなく、より広い視野からより多様な対象を複合的に学ぶことを想定しているように思われる。その点では、「世界市民」の育成を目指す教科として位置づけられるものであり、また近年の潮流ともいえる SDGs を意識した教科とも理解することができる。こうした教科の開設は、「市民性教育」の重視の動きという解釈も可能であり、近年の世界の潮流を意識した教育目標と見なすことができるだろう。そして、探究学習の観点からは、活動の主題として重要なテーマを提示する科目といえる。

こうした社会科などの教科学習活動として展開される探究活動は、調査や分析を主体とする傾向がある。一方、より広い領域の活動を展開する時間として、「創意的体験活動」が導入されている。

### （3）創意的体験活動と「2022年改訂教育課程」

創意的体験活動は、2009年改訂教育課程で導入された教科外活動である。従来教科以外の活動としては「裁量活動」と「特別活動」があったが、これを統合するかたちで開設された。その背景には、児童生徒の体験学習の強化、裁量活動や特別活動の形骸化及び両者の内容の重複などがあったことが指摘されている（石川 2018：33、田中 2017：32）。創意的体験活動の目標や内容の変化については次節以降で詳述するとして、ここでは教育課程における同活動の位置づけを確認し

ておきたい。

創意的体験活動は、初等学校から高等学校まで、すべての学校段階で開設されている。初等学校及び中学校では週当たり3時間(初等学校第1, 2学年は、「安全な生活」<sup>2</sup>を除いた4時間)、高校では3年間で24単位、週当たりの計算だと4時間の計算となる。この時間配分は、2009年改訂教育課程と2015年改訂教育課程で基本的に違いはない<sup>3</sup>。しかし、2022年12月に公示された2022年改訂教育課程では、初等学校第1, 2学年では週当たり3.5時間に、高校では3年間で18単位すなわち週当たり約2.8時間に縮小された(表2参照)。詳細は後述するが、授業時数の縮小は、創意的体験活動の性格の変化の一端につながるものと捉えることができる。

創意的体験活動以外の改訂点のうち、探究学習の関連でいえば、2009年改訂以来の領域の区分がなくなった。「基礎」や「探究」など4つの領域がなくなり、科目としての「韓国史」は社会科科目に再々編された。もっとも、前課程で「探究」領域に位置づけられていた「統合社会」などの科目の性格が変わったわけではなく、探究学習に対して大きな見直しが行われたわけではない。領域の区分の削除は、高校単位制<sup>4</sup>の導入に伴う改編の一部である。

ただ、本稿が注目する創意的体験活動に関しては、2022年の改訂で大きな変更がなされた。以下では、創意的体験活動の導入以来の目標や内容の変化を追いながらその意味を考えよう。

## 2. 「創意的体験活動」の変化

### (1) 目標

#### ①2009年改訂教育課程

2009年改訂教育課程で初めて導入された際の創意的体験活動の目標は、次のように定められた。

「児童生徒たちは創意的体験活動に自発的に参加し、個々人の素質と潜在力を啓発・伸長させ、自律的な生活姿勢を育み、他者に対する理解に基づいて分かち合いと配慮を実践することで共同体意識と世界市民として備えるべき多様で水準の高い資質の涵養を志向する」(教育科学技術部 2009:1)

注目すべき点は、児童生徒の「素質と潜在力を啓発・伸長」させることが言及されていることである。素質と潜在力の啓発・伸長については、後述する2015年改訂や2022年改訂の目標にも盛り込まれており、創意的体験活動が目指す核心の1つといえよう。そしてこれについては、2009年改訂前後から取組が本格化した大学入試改革との関連を指摘することができる。政府は、教科成績中心の評価に基づく大学入試からの脱却を目指すべく入試改革を進めているが、その一環として導入された施策の1つに入学査定官制度がある。同制度は、「入学査定官」と呼ばれる専門職が入学志願者の志望書や推薦書、学校生活記録簿<sup>5</sup>など各種の書類の審査と面接を通して入学者を選抜する入試形態で、2007年の実験的な導入に始まり、2012年から全面的に実施されている。その第一義的な目的は、志願者の素質と潜在力を評価することであり(松本 2016:31)、創意的体験活動の目標と共鳴する。

表2: 「2022年改訂教育課程」の高校課程(普通課程)

教科(群)	共通科目	必修履修単位数	自律履修単位数
韓国語	共通国語1, 共通国語2	8	生徒の適性と進路を考慮して編成
数学	共通数学1, 共通数学2	8	
英語	共通英語1, 共通英語2	8	
社会 (歴史/道徳を含む)	韓国史1, 韓国史2	6	
	統合社会1, 統合社会2	8	
科学	統合科学1, 統合科学2	10	
	科学探究実験1, 科学探究実験2		
体育		10	
芸術		10	
技術・家庭/情報/第2外国語/漢文/教養		16	
小計		84	90
創意的体験活動		18(288時間)	
総履修単位数		192	

(出典) 教育部「2022年改訂教育課程 高等学校 総論」2022年より筆者作成。

ただし、創意的体験活動の導入が生徒に対する評価の多元化のみを意図しているとは限らない。2009年改訂教育課程が公示された際の報道資料に添付された「2009年改訂教育課程、問答資料」では、「入学査定官制度が拡大するにしたがって、大学入学選考で創意的体験活動（自律活動、サークル活動、奉仕活動、進路体験活動など）が重要視されることにより、（高校のカリキュラムが一筆者注）国、英、数中心の入試本位で編成されることを防止することができる」（教育科学技術部 2009：6）と、入試対策に偏重しがちな高校教育の是正の狙いを明らかにしている。そして、学校の入試偏重教育からの脱却の背景をさらに深掘りすると、私教育の抑制に行きつく。長年にわたって韓国が取り組む大学入試改革の第一の目標は、私教育の抑制にある。学歴社会を背景とする受験競争がし烈さを継続する中、活発な私教育の利用は家庭の経済格差が学歴に及ぼす影響に対する懸念を惹起し、さらに近年は家計への圧迫という観点から少子化の一因として問題視されている。創意的体験活動の導入には、積年の入試改革の有力な一手という側面も見いだされるのである。

## ②2015年改訂教育課程

2015年改訂教育課程では、創意的体験活動の目標は次のように定められている。

「健全で多様な集団活動に自発的に参加し、分かち合いと配慮を実践することで共同体意識を涵養して、個人の素質と潜在力を啓発・伸長させ、創意的な人生の態度を育む」（教育部 2015：5）

2009年改訂と比較した時、まず気づくことは2015年改訂では「世界市民」というキーワードが消失していることである。これは一見奇妙に思える。第1節でみたとおり、2015年改訂では「市民性教育」に力点を置く傾向がみられるからである。1つの解釈としては、既述の「統合社会」のような市民性教育を担う主要教科が設置されたことにより、創意的体験活動の役割がより明確化されたとみることができる。もう1つには、創意的体験活動では必ずしも「国際化」や「グローバル化」といったテーマが強調されているわけではないことも関係がありそうである。2009年改訂では、「ボランティア活動」の例の1つとして「国際協力と難民救護など」（教育科学技術部 2009：6）があげられていたが、2015年改訂ではそうした類の例は言及されていない。

また、2015年改訂では「創意的な人生」の文言が挿入されている。「創意的」はこの活動の本質にかかわるものであり、明示されていて何ら不思議ではないのだ

が、改めて強調している点に、創意的人材の育成に対する政府の強い意識を垣間見ることができる。また同時に、教科外活動としての創意的体験活動の狙いをより鮮明に示したものと解される。

なお、各活動領域に関わる目標は次のとおりである。

「特色ある活動に自律的に参与し、日常の問題を合理的、創意的に解決することができる能力を育む。」（自律活動）

「サークルに自発的に参与し、素質と適性を開発して、日常の生活を豊かに飾っていくことができる審美的な感性を育む。」（サークル活動）

「分かち合いと配慮を実践し、環境を保存する生活習慣を形成して、ともに生きる人生の価値を体得する。」（ボランティア活動）

「興味、素質、適性を把握し、自我の正体性を確立して、自身の進路を開発し持続的に発展させる。」（進路活動）

## ③2022年改訂教育課程

2022年12月に公示された2022年改訂では、創意的体験活動の目標は次のように定められている。

「創意的体験活動は、児童生徒が創意的で多様な活動に主体的に参与し、個人の素質と潜在力を啓発・伸長し、創意的な人生の態度を育み、共同体意識を涵養する」（教育部 2022：7）

現行の2015年改訂と比較すると、他者や共同体に関して文言の減少や言及順序の後退などがみられるが、内容としてはそれほど大きく違わない。大きな変化があるのは、上記の目標に続けて、各学校段階での目標が定められていることである。これまでの教育課程では、創意的体験活動の全体に係る目標に続けて提示されていたのは、各活動領域の目標であった。教育課程の他の箇所でも示されたことはなく、創意的体験活動の学校段階別の目標が示されるのは、今回が初めてである。その意図するところについては、関係資料をさらに精査する必要があるが、各学校段階での活動の特性や学校間の接続を強調する狙いがありそうである。というのも、全体の目標において後退したようにみえる他者や共同体に関する意識は、実は中学校や高校の目標に落とし込まれている。すなわち、初等教育段階と中等教育段階での活動の狙いの違いをより明らかにしようとする意図があるものと思われる。各学校段階の目標は、次のとおりである。

「初等学校では、自身の個性と素質を探索して発見し、共同体生活に必要な基本生活習慣と市民意

識を涵養する。」

「中学校では、自我の正体性を確立して、他者とともに生きていく態度を増進し、自身の進路を積極的に探索する能力を増進する。」

「高等学校では、共同体意識の確立を基盤として分かち合いと配慮を実践し、自身の進路を創意的に準備し設計する力量を涵養する。」

一方、大きな変化として注目されるのは、共通指針や領域別指針といった、学校あるいは教師が従わなければならない指針を規定していないことである。従前は、石川が指摘するように17の共通指針と25の領域別指針が定められていたのだが（石川、2018:35）、2022年改訂教育課程ではこれらすべてが削除された。もっとも、「設計の原則」として授業時数や学校の自律性、後述する活動領域などはこれまで同様に提示されており、学校や教師の裁量が大幅に拡大されたわけではない。しかし少なくとも、創意的体験活動の規定に対する政府の姿勢に変化の方向が表れてきたといえるであろう。

## （2）活動領域

本稿の冒頭で述べたとおり、「創意的体験活動」の活動は従来、「自律活動」、「サークル活動」、「ボランティア活動」、「進路活動」の4つの領域に分類されてきた。しかし、2022年改訂（試案）では、ボランテ

ィア活動がサークル活動に統合される形で、「自律・自治活動」、「サークル活動」、「進路活動」の3つの領域へと再編されている。その理由について教育部は、「児童生徒の自己主導性と選択を拡大し、児童生徒の自発的な参与のため」としている。従来の「自律活動」を「自律・自治活動」に改編している点にその意図が窺われるが、より端的には、第1節でみたとおり、創意的体験活動の時間が縮小していることが関係していそうである。すなわち、学校の裁量で創意的体験活動を含めて教科目の時数を20%の範囲内で増減させることができるようになったことや、高校の創意的体験活動の単位数が従来の24単位から18単位へと減少（時間数に換算すると、3年間408時間から288時間へ減少）したことで、創意的体験活動の活動領域そのものも縮小する必要が生じた。活動領域数の削減は、各生徒が活動しなければならない活動領域の数そのものの減少を意味するため、最もシンプルな方策といえるだろう。

さて、再編された創意的体験活動の3つの活動領域の内容は表3のように示されている。

2015年改訂の創意的体験活動（表4）と比較すると、領域の縮小とともに、例示としてあげられている活動事例も減少している。その中であって、「主題探究活動」として生徒の研究活動が事例の筆頭に挙げられていることは注目されるが、いずれにせよナショナル・スタンダードは、「大綱化」といほどの水準ではない

表3：「2022年改訂教育課程」の創意的体験活動の3領域

領域	活動	活動の例
自律・自治活動	自律活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題探究活動：個人研究、小集団共通研究、プロジェクトなど</li> <li>・適応及び開拓活動：入学早期適応、学校理解、情緒支援、関係形成など</li> <li>・プロジェクト型ボランティア活動：個人プロジェクト型ボランティア活動、共同プロジェクト型ボランティア活動など</li> </ul>
	自治活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本生活習慣の形成活動：自己管理活動、環境・生態意識の涵養活動、民主市民意識の涵養活動など</li> <li>・関係形成及び疎通活動：子弟同行、討議・討論、協力的論議など</li> <li>・共同体自治活動：学級・学年・学校など共同体中心の自治活動、地域社会連携自治活動など</li> </ul>
サークル活動	学術・文化及び余暇活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学術サークル：教科目連携及び学術探究活動など</li> <li>・芸術サークル：音楽関連活動、美術関連活動、公演及び展示活動など</li> <li>・スポーツサークル：球技運動、道具運動、季節運動、武術、舞踊など</li> <li>・遊戯サークル：個人遊戯、団体遊戯など</li> </ul>
	ボランティア活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内ボランティア活動：仲間相談、持続可能な環境保護など</li> <li>・地域社会ボランティア活動：地域社会参与、キャンペーン、才能寄付など</li> <li>・青少年団体活動：各種青少年団体活動など</li> </ul>
進路活動	進路探索活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己探索活動：自己理解、生涯探索、価値観確立など</li> <li>・進路理解活動：職業興味及び適性探索、進路検査、進路成熟度探索など</li> <li>・職業理解活動：職業観の確立、仕事と職業の役割理解、職業世界の変化の探求など</li> <li>・情報探索活動：学業及び進学情報の探索、職業情報及び資格（免許）制度の探索、進路進学及び就業関係機関の探訪など</li> </ul>
	進路設計及び実践活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路準備活動：進路目標の設定、進路実践計画の策定など</li> <li>・進路計画活動：進路相談、進路意思決定、進路設計など</li> <li>・進路体験活動：地域社会・大学・企業連携体験活移動など</li> </ul>

（出典）教育部「創意的体験活動教育課程」（教育部公示第2022-33号 [別冊40]）、2022年、9頁。

にせよ、これまで締め付けてきたそのフレームをやや緩める傾向をみせ始めたといえることができるだろう。その点では、先述の共通指針や領域別指針の削除と同じ方向に沿った変化の表れといえるであろう。

### 3. 考察

ここまでの整理と分析をふまえ、韓国の探究学習の特性と意義を考察する。まず最大の特徴は、活動領域が標準化されていることである。導入以来、創意的

体験活動には自律活動、サークル活動、ボランティア活動、進路活動の4つの領域が設定され、すべての学校に適用されてきた。新しい教育課程では領域が4つから3つに減少したが、標準化されていることには変わらない。もちろん具体的な活動テーマや内容は、各学校・学級や生徒が設定するのだが、探究活動の大まかなテーマを国が規定しているという点は大きな特性といえる。

一方、これらの活動領域は、「体験活動」という名称

表4：「2015年改訂教育課程」の創意的体験活動の4領域

領域	活動	活動の例
自律活動	自治・適応活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本生活習慣形成活動－礼節、遵法、秩序など</li> <li>・協議活動－学級会議、全校会議、模擬議会、討論会、自治法定など</li> <li>・役割分担活動－一人一役など</li> <li>・相談活動－学習・健康・性格・学友関係相談活動、仲間相談活動など</li> </ul>
	創意主題活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校・学年・学級特色活動－百冊読書、縄跳び、敬語使用、演劇遊び、ミュージカル、菜園活動など</li> <li>・主題選択活動－主題探究型小集団共同研究、自由研究、プロジェクト学習（歴史探訪プロジェクト、博物館見学活動）など</li> </ul>
サークル活動	芸術・体育活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽活動－声楽、合唱、ミュージカル、オペラ、オーケストラ、国楽、サムルノリ、バンド、ナンタなど</li> <li>・美術活動－現代美術、伝統美術、絵画、彫刻、写真、アニメーション、工芸、漫画、壁画、デザイン、美術館探訪など</li> <li>・演劇・映画活動－演劇、映画評論、映画製作、放送など</li> <li>・体育活動－シルム、テコンドー、テッキョン、伝統武術、球技運動、水泳、ヨガ、ハイキング、登山、自転車、ダンスなど</li> <li>・遊戯活動－ボードゲーム、共同体遊び、マジック、民族遊びなど</li> </ul>
	学術文化活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人文素養活動－文芸創作、読書、討論、韓国語探究、外国語会話、人文学研究など</li> <li>・社会科学探究活動－現地調査、歴史探究、地理文化探究、多文化探究、人権探究など</li> <li>・自然科学探究活動－発明、持続可能な発展研究、適正技術探究、農漁村発展研究、生態環境探究など</li> <li>・情報活動－コンピュータ、インターネット、ソフトウェア、新聞活用など</li> </ul>
	実習労作活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家事活動－料理、手芸、裁縫、生け花、製菓・製パンなど</li> <li>・生産活動－栽培、園芸、菜園、ペット飼育など</li> <li>・労作活動－木工、工作、設計、製図、ロボット制作、組立、模型製作、インテリア、美容など</li> <li>・起業活動－起業研究など</li> </ul>
	青少年団体活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国家公認の青少年団体の活動など</li> </ul>
ボランティア活動	隣人手助け活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だち手助け活動－学習が遅れている友人手助け、障害のある友人手助けなど</li> <li>・地域社会活動－不遇な隣人手助け、難民救護活動、福祉施設慰問、才能寄付など</li> </ul>
	環境保護活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境浄化活動－きれいな環境整備、共同施設物の保護、文化財保護、地域社会育成など</li> <li>・自然保護活動－植樹活動、資源再活用、低炭素生活習慣化など</li> </ul>
	キャンペーン活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公共秩序、環境保全、献血、各種偏見克服キャンペーン活動など</li> <li>・学校暴力予防、事故予防、性暴力予防キャンペーン活動など</li> </ul>
進路活動	自己理解活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長所増進活動－自我正体性探究、自尊心の増進など</li> <li>・自己特性理解活動－職業興味探索、職業適性探索など</li> </ul>
	進路探索活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事と職業理解活動－仕事と職業の役割と重要性及び多様性理解、職業世界の変化の探究、職業価値観の確立など</li> <li>・進路情報探索活動－教育情報探索、進学情報探索、学校情報探索、職業情報探索、資格及び免許制度探索など</li> <li>・進路体験活動－社会人インタビュー、社会人招へい講演</li> </ul>
	進路設計活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画活動－進路相談、進路意思決定、学業に対する進路設計、職業に対する進路設計など</li> <li>・準備活動－日常生活管理、進路目標設定、進路実践計画の策定、学業管理、求職活動など</li> </ul>

（出典）教育部「創意的体験活動教育課程（安全な生活を含む）」（教育部公示第2015-74号【別冊42】）、2015年、6-8頁より筆者作成。

が示唆するように、課題解決学習に重点が置かれているわけではないことも特徴の1つである。例えばサークル活動では、音楽やスポーツなどの活動も想定されており、日本の学校の特別活動であるクラブ活動に位置づけられるようなものも含まれている。また、進路活動が含まれている点も注目し得る。韓国では、2009年改訂教育課程から中学校と高校の選択科目として「進路と職業」が開設され、進路進学相談教師<sup>6</sup>が導入されるなど、進路教育 (career education) に力を注いでいる (松本 2012: 39)。その背景としてあげられるのが大卒者の就職難で、政府はその要因の1つに等教育段階における生徒のキャリア設計の不足をみているのである。

さて、こうした特性を備える探究活動には、韓国の教育改革の観点に立つと、どのような意義が見出されるのだろうか。政府が探究活動の領域を規定することの意味について、一般的には、当該領域の活動が目指す資質・能力の育成に資するという想定のもと、政府として積極的に推奨するということが考えられる。しかし、本稿は、大学入試改革との関係を指摘する。既述したとおり、創意的体験活動は、2000年代後半以降の入試改革の目玉ともいえる入学査定官制度と密接な関わりを持っている。すなわち、入学査定官による選考においては教科成績以外の学習活動の評価が重視され、創意的体験活動はその重要な参考資料となる。その際、受験生が様々な学校出身であることを考えれば、ある程度評価指標をコントロールする必要が生じ得る。なぜなら、韓国の入試改革の第一義は入学選考における公平性の確保だからである。しかし、各学校で多様な活動が展開される創意的体験活動の評価にあたっては、公正性の問題も生じ得る。そうした懸案への対策の1つは、評価対象となる受験生の活動内容を並置することであろう。政府による創意的体験活動の活動領域の規定の意義は、入試改革の文脈でも読み取ることが可能なのである。

しかし、そうすると疑問も生じる。共通指針の削除や活動領域の統合など、2022年改訂教育課程で示された規定の緩和は何を意味するのか。今後の入試改革の方向性とも関係しているのか。政府文書から読み取れるのは各学校の自律性の向上や裁量の拡大であり、その点では、石川が指摘するような人的資源や時間的な制約の弊害を打破する意図が第一にあるのかもしれない。このように今回の改編については、現場の負担をめぐり政府と学校との葛藤の妥協点であると解釈することは可能である。一方で、入試との関連性も無視することはできない。1つの仮定としては、高校単

位制の導入にともない入試のあり方にも変化が見込まれているということだが、今後検証していく必要があるだろう。

## おわりに

以上、韓国の学校における探究活動について、全国水準の基準である教育課程と、教科外活動である創意的体験活動の改革、変遷を中心に考察してきた。そこで明らかになったのは、活動領域が政府の基準によって標準化されていることや、課題解決型の学習以外の多様な活動が想定されていることである。こうした特性の意義は、入試における選考の資料として活用する際に見いだされる。すなわち、教科成績以外の多様な活動を参考資料とするとともに、活動領域を限定することで選抜の公正性を確保しようという狙いを指摘できるだろう。

一方、2024年以降 (高校は2025年度以降) に漸次導入されていく新しい教育課程である2022年改訂教育課程では、細目的な基準の一部見直しをうかがわせるような動きもみせている。長年にわたって私教育の抑制に腐心してきた政府が、入試改革に安易に妥協するとは思えない。高校単位制の導入にともなう学校や生徒の裁量拡大に連動した動きであるとは思いますが、創意的体験活動をめぐる改編が何を意味するのか、今後さらなる検討が必要である。

## 〔注〕

<sup>1</sup> 第1次教育課程が制定される前までは、朝鮮戦争の混乱などもあって、米軍政下で作成されたものが用いられていた (馬越 1981: 52)。

<sup>2</sup> 初等学校第1, 2学年のみを対象とする安全教育に関する教科。修学旅行中の高校生を含む多くの被害者を出した2014年4月のセウォル号沈没事故を受け、学校での安全教育の一環として導入された。

<sup>3</sup> 2015年改訂教育課程の初等学校第1, 2学年では、創意的体験活動に「あんぜんな生活」を実施する時間が組み込まれたため、2009年改訂と比べて1年あたり32時間増加している。

<sup>4</sup> 高校単位制は、大学のように、生徒が履修計画を策定して修了に必要な単位を取得する制度。2020年度から一部の学校で試験的に導入が始まり、2022年改訂教育課程が実施される2025年度 (高校第1学年から漸次導入) から本格的な導入が予定されている。

<sup>5</sup> 学校生活記録簿 (通称「学生簿」) は、日本の調査書に相当するもので、学籍事項や出欠状況などの基本情報のほか、教科成績や教科外活動、取得資格、行

動特性及び総合意見，創意的体験活動の状況などについて記載される。

- <sup>6</sup> 進路進学相談教師は，中等教育段階での進路に関する総合的な支援・指導を行う。具体的には，科目「進路と職業」の授業担当や入学査定官制度の準備支援，進路教育の年間計画の策定などが職務とされる。

### 〔参考文献・資料〕

- 石川裕之「韓国における教科外活動の概要とその特徴—「創意的体験活動」に注目して—」『畿央大学紀要』15（2），2018年，31－37頁
- イ・ジンソク『統合社会』知学社，2017年
- 馬越徹『現代韓国教育研究』高麗書林，1981年
- 教育科学技術部「2009年改訂教育課程，問答集」，2009年
- 教育部「創意的体験活動教育課程（安全な生活を含む）」（教育部公示第2015-74号 [別冊42]），2015年
- 教育部「改訂教育課程社会科教育課程」（教育部公示第2015-74号 [別冊7]），2015年

- 教育部「2022年改訂教育課程総論主要事項の発表」（報道資料），2021年
- 教育部「初・中等学校教育課程総論」（教育部公示第2022-33号 [別冊1]），2022年
- 教育部「創意的体験活動教育課程」（教育部公示第2022-33号 [別冊40]），2022年
- 田中光晴「韓国のナショナルカリキュラムにおける「創意的体験活動」：特別活動と裁量活動の統合」『日本特別活動学会紀要』25，2017年，29－38頁
- チョ・ソンオク（2013）「高校課程で探究科目学習の必要性」『韓国地理環境教育学会誌』21（3），103－115頁
- 松本麻人「韓国 公教育再生の核心」小川佳万，服部美奈編著『アジアの教員：変貌する役割と専門職への挑戦』ジヤース教育新社，2012年，32－52頁。
- 松本麻人「韓国における大学入試改革—新たな「学力」の評価への挑戦—」『比較教育学研究』53，2016年，28－39頁



## Characteristics and Significance of Inquiry-Based Learning at High Schools in South Korea: Focusing on Activity Areas

Asato MATSUMOTO\*

This paper reflects on the characteristics and significance of inquiry-based learning, which has been attracting attention in recent years. In this paper, we focus on “creative experiential learning activities” by organizing the purpose and contents of the activities, concentrating on the activity areas, and considering the changes caused by the revision of the curriculum.

One of the characteristics of the Korean curriculum is that it prescribes in detail the contents, evaluation standards, methods, and goals for each subject. All primary and secondary schools, including private schools, must follow the curriculum.

Creative experiential learning activities—the particular focus of this paper as a kind of inquiry-based learning—are extracurricular activities introduced in 2009 in the revised curriculum and established for all grades. Four activity areas were set: “autonomous activities,” “club activities,” “volunteer activities,” and “career activities.” The curriculum includes goals and examples for each activity.

Characteristics of creative experiential learning activities in Korea include detailed regulation of the curriculum and standardized activity areas. Besides activities related to problem solving, there are also a variety of experiential learning practices. The significance and characteristics of creative experiential learning activities can be referred to in relation to university entrance examination reform. The government is working on an entrance examination system that evaluates students’ learning activities other than academic achievements. To fairly utilize the variety of creative experiential learning activities as reference materials for entrance examinations, specifying the activity areas is required.

However, in the new curriculum announced in 2022, the activity areas inherent in creative experiential learning activities and the common guidelines that schools and teachers must follow are reduced. In the future, it is expected that schools’ autonomy over creative experiential learning activities will expand.

---

\* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

